

職員の皆様はいかがお過ごしでしょうか？ 令和3年度も
GOOD CARE 新聞をよろしくお願いいたします。

さて、今回の GOOD CARE は **COVID-19 特集**です。

関西労災病院のコロナ最前線で活躍されている

救急外来、HCU、北7階 を紹介します！！



2021年6月発行

救急外来

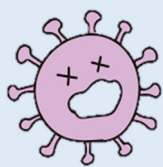
救急外来での受け入れについて ICU 小浴師長補佐にインタビューしました。

～コロナの患者を受け入れることについて、最初どう感じましたか？～

◎ ICU の看護師としてみんなが使命感を強く持ってくれたと思う。師長からいづれコロナ患者を受け入れる日が来ることを、みんなに伝えていたので、みんなが意識してくれていた。COVID-19 の患者を受け入れるという抵抗や反発はなく、『こんな時だからこそ受け入れていかなきゃいけない。』というところに ICU の使命感が強く見られた。

～日々気をつけていることは？～

◎ 師長・補佐・リーダー格とずっと話し合っているのですが、濃厚接触者を救急外来で受け入れる、ICU で COVID-19 の患者さんを看護する中で、他患者を感染させない、自分も感染しないためにどうするかということを常々考え、ICT と一緒にゾーニングをしました。救急外来でも、テントの中と外でどういう動きをしているか考え、患者さんの流れもどこから入ってきてどういう風に流れていくかをみんなに書面で知らせ、実施してきたことで大きな感染拡大にならずに済んだと思います。『新たな濃厚接触者を作らないようにする！』ことをキーワードで僕たちは動いていました。



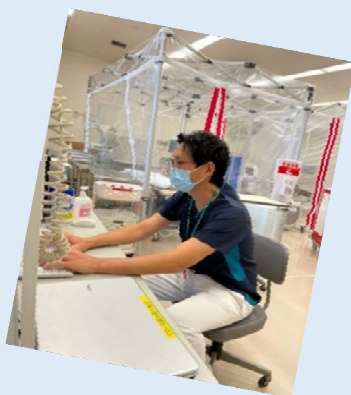
COVID-19 患者を受け入れる救急外来の様子

～スタッフは今でも感染するのではという不安があると思いますが、当初はもっと不安が強かったのでは？～

◎ 運ばれてくる全患者が感染患者だと思って対応してくれていた。自分自身を守り、他の患者を感染させないことが、安心材料となりスタッフへのサポートに繋がると考え行動していた。

～みなさんにメッセージを～

◎ スタッフが最前線で救急搬送患者の対応をしてくれている。そこに対して使命感のもと緊張感を持ってやってくれている。本当に全員が大変な中、対応してくれている。スタッフ全員が頑張ってくれ感謝しています。



HCU

コロナ患者と関わって

私は患者 COVID-19 との関わりを通して学ぶことが多くありました。その中でも、COVID-19 患者は急激に状態が悪くなることが多く、前日まで安定していた方が数日後には人工呼吸器が必要になる、お亡くなりになることもありました。その様な状況下で直接面会できず、患者や家族の不安も大きく、看護師としてできることも限りがありもどかしく感じることもありましたが、窓越しやテレビ電話を使用した面会方法を取り、話されている様子を見て、制限がある中でも少しでも工夫して家族との時間を作れる時間も大切であると改めて感じました。



小川さん

急に COVID-19 重症病棟になることが決まり翌日には COVID-19 患者の受入が開始となった。自分自身も戸惑いがある中で、スタッフに感染対策を徹底してもらうことと不安の表出ができるように努めた。ECMO、CHDF を行っている患者を受け入れることとなり 1 ヶ月で対応できるスタッフを 2 名から 11 名に増やすことができた。頼りの電子カルテも持ち込めないような環境に対し、どのように介入したら患者にとって良い影響が与えられるか、良い看護が提供できるかを HCU 全員で考えることができた。部署全体で一致団結して対応できたことが今の HCU の力になっている。

前原 HCU 師長補佐



北7階

自分の病棟が COVID-19 患者の専用病棟になると決定したときは、スタッフ全員が様々な不安を抱えスタートしました。そんな中で医師、感染症専門の看護師と連携することにより COVID-19 への知識が深まってきました。なかなか陰性化せず療養期間が長くなっていくにつれて患者さんからは毎日不安の声がきかれており、涙されるかたもいました。私たちは看護師として感染症対策をしながらの限られたケアの中で少しでも患者の不安が軽減されるよう日々患者について話し合いケアに励んでいました。COVID-19 患者の看護を通して、メンタルケアについて改めて深く考えるきっかけにもなりました。

木村さん



受け入れ当初は全くイメージがつかなかったもので、感染の久保田さんに勉強会をしてもらい、実際に受け入れが始まってからもスタッフの意見を取り入れて、物品の配置を考えました。日々、生まれた決まり事をファイリングしてみんなに周知できるようにしました。普段とは異なる疾患の患者が入院しているので、医師とコミュニケーションをとり疾患理解を深めた。家族の面会が不可であったため、手紙のやり取りなど、患者と家族の橋渡しの役割を大切にしました。病棟スタッフとは、患者家族の反応や病態についてなどカンファレンスで共有し、次に生かせるように家族看護を考えました。スタッフのメンタルフォローとしては、補佐としては日々声をかけつつけることで、一緒にケアなどを考えていくことができました。

仲山 N7 師長補佐

次回は 9 月頃に発行予定です。コメディックスで皆様からのご意見をお聞かせください。
「いいね！」情報もお待ちしています。
自薦、他薦は問いません！



発行元：看護部定着活動委員会

